

歯科医師国家試験(国試)の難関化が止まりません。2014年の第107回歯科国試から合格率が急速に低下。60%台で推移しています。さらに、歯科大学の進級試験、卒業試験なども難しくなっており、歯学部に入學しても卒業できない、卒業しても歯科医師になれない人を大量に生んでいます。しかし、厚生労働省も文部科学省も、実態の解明と事態の沈静化に乗り出そうとはしていません。歯科学生の各種試験対策をサポートする立場から、東京デンタルスクールの岡田優一郎塾長にお話を伺いました。



編集室長  
安田 登氏

歯科医院 キャビネ・ダンテール御茶ノ水院長。東京医科歯科大学卒、パリ大学医学部大学院(フランス政府給費留学生)を経て歯学博士(東京医科歯科大学)。東京医科歯科大学講師などを経て、同大非常勤講師・臨床教授を歴任。日本接着歯学会評議員(元副会長)、日本補綴歯科学会代議員。著書『来て見て接着』(クインテッセンス出版)他。



今回のお客さま  
岡田優一郎氏

2009年、日本大学松戸歯学部卒業。学部長賞受賞。日本救急学会 ICLS プロバイダー。歯学部1年生～6年生の現役生、留年生、国試浪人生の進級、CBT、歯科医師国家試験対策のマンツーマン個別指導予備校「東京デンタルスクール」塾長。

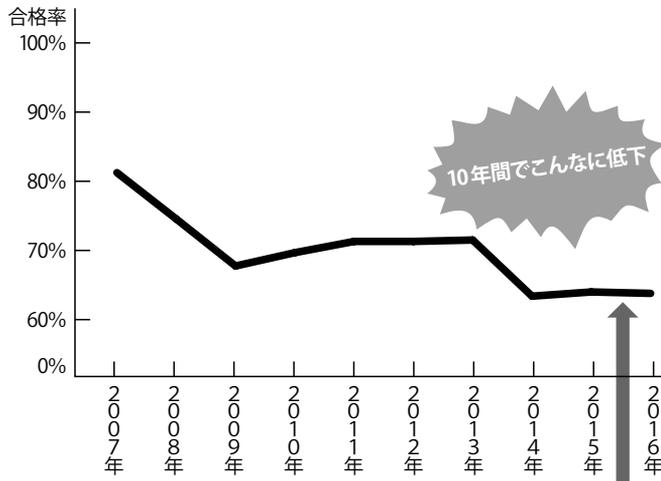


聞き手：本誌編集長  
水谷惟紗久

## ■ 歯科国試、卒試の現状と今後

# 膨大なドロップアウトがもたらすもの

図1 歯科国試10年間の推移



年	回数	受験者数	合格者数	合格率
2007年	第100回	3,200人	2,673人	80.8%
2008年	第101回	3,295人	2,375人	74.2%
2009年	第102回	3,531人	2,383人	67.5%
2010年	第103回	3,465人	2,408人	69.4%
2011年	第104回	3,378人	2,400人	71.0%
2012年	第105回	3,326人	2,364人	71.0%
2013年	第106回	3,321人	2,366人	71.2%
2014年	第107回	3,200人	2,025人	63.2%
2015年	第108回	3,138人	2,003人	63.8%
2016年	第109回	3,103人	1,973人	63.6%

岡田優一郎「歯科医師国家試験浪人の問題点」より改変

### 難関化がもたらす 多数の留年者

近年、歯科の国試合格率が絞り込まれていることにより、毎年1000人以上の浪人生が生み出される構造になっています。これを改善しようとする動きは、今のところ見られません。歯科国試対策のマンツーマン予備校を運営する岡田先生に、国試、卒試、CBT(Computer-Based Testing)などの現状を教えてくださいませんか。

安田 近年、歯科の国試合格率は急激に

図2 第109回歯科医師国家試験  
 学校別合格者状況 (新卒。出願者数÷受験者数÷留年者数)

学校名	新卒			
	出願者数	受験者数	合格者数	合格率
北海道大学歯学部	55	54	48	88.9%
東北大学歯学部	59	59	49	83.1%
東京医科歯科大学歯学部	55	55	52	94.5%
新潟大学歯学部	42	42	35	83.3%
大阪大学歯学部	61	61	52	85.2%
岡山大学歯学部	54	54	44	81.5%
広島大学歯学部	49	48	38	79.2%
徳島大学歯学部	33	31	30	96.8%
九州大学歯学部	50	49	41	83.7%
長崎大学歯学部	38	38	31	81.6%
鹿児島大学歯学部	51	47	32	68.1%
<b>国立 計</b>	<b>547</b>	<b>538</b>	<b>452</b>	<b>84.0%</b>
<b>九州歯科大学</b>	<b>97</b>	<b>97</b>	<b>76</b>	<b>78.4%</b>
<b>公立 計</b>	<b>97</b>	<b>97</b>	<b>76</b>	<b>78.4%</b>
北海道医療大学歯学部 (東日本学園大学歯学部を含む)	81	51	25	49.0%
岩手医科大学歯学部	83	48	26	54.2%
奥羽大学歯学部 (東北歯科大学を含む)	71	49	21	42.9%
明海大学歯学部 (城西歯科大学を含む)	145	81	44	54.3%
日本大学松戸歯学部	109	73	43	58.9%
東京歯科大学	147	127	120	94.5%
日本歯科大学	130	96	81	84.4%
日本大学歯学部	130	113	85	75.2%
昭和大学歯学部	100	97	77	79.4%
鶴見大学歯学部	145	98	39	39.8%
神奈川歯科大学	127	67	55	82.1%
日本歯科大学新潟生命歯学部 (日本歯科大学新潟歯学部を含む)	59	47	35	74.5%
松本歯科大学	81	37	30	81.1%
愛知学院大学歯学部	143	112	85	75.9%
朝日大学歯学部 (岐阜歯科大学を含む)	132	77	46	59.7%
大阪歯科大学	106	73	57	78.1%
福岡歯科大学	100	85	38	44.7%
<b>私立 計</b>	<b>1,889</b>	<b>1,331</b>	<b>907</b>	<b>68.1%</b>
<b>認定および予備試験</b>	<b>3</b>	<b>3</b>	<b>1</b>	<b>33.3%</b>
<b>その他 計</b>	<b>3</b>	<b>3</b>	<b>1</b>	<b>33.3%</b>
	<b>2,536</b>	<b>1,969</b>	<b>1,436</b>	<b>72.9%</b>

岡田優一郎「歯科医師国家試験浪人の問題点」より改変

低下しています。2014年(第107回)歯科国試の合格率が63・2%となつて以降、60%台が続いています(図1)。今後もこの傾向が続くのでしょうか。それとも、何か改善策のようなものが検討されているのでしょうか。

岡田 さらに絞り込む方向に向かって

います。合格者数で見ると、現状では1800〜2000人ですが、今後は1500人ほどに向かわせるのが厚生労働省の政策です。ところが、歯学部卒業者数は2400〜2500人ほどですから、毎年1000人以上の浪人が生まれることになります。すでに、新卒者

の出願者数から合格者数を引いた数が1000人を上回っています。それよりさらに厳しくなるのは確実だと考えられています。私立の場合、歯学部を6年で卒業してストレートで国試に合格する人は、全体の20%ほどにとどまります。また、国試

は卒業前に出願するため、出願者数から受験者数を引いた数がおおむね留年者数になります(図2)。私立歯科大学は、合格しそうでない学生を大量に留年させているのです。

歯学部受験希望者は国試の合格率を気にするので、大学のイメージ戦略では合格率の高さが重要になります。しかし、これには留年率は加味されていません。国試の合格率が高いと評判の大学の中には、低学年時から多数の学生を留年させ、6年次に進むまでに相当数が淘汰されている所もあります。

ある歯学部では、かつては5年から6年に進む病院実習のタイミングで留年する人はまずいなかったようですが、現在では、毎年約50人の留年者が出るようになっていているといえます。

**安田** 毎年留年者が出る上、国試が難関ということでは、とりわけ私立の歯学部に入學するのはハイリスクな選択肢になってしまいますね。

歯科医師の需給バランスが供給過多で、「歯科医師数を抑える必要がある」と

いう声がある一方で、私立歯科大学の定員は、事実上絞ることができません。そのため、国試を難関化させる政策が採用され、それに対応する形で留年者が増大するという構造ですね。最終学年で「合格しそうでない」と判断されて留年させられてしまう、ということなら理解できますが、それ以外には、どのタイミングで留年者が増えるのでしょうか。

**岡田** 4年次のC B Tが難関化しています。新たに出题される新規問題は、その年の点数には加算されませんが、正答率の高い問題から順次採用され、次の年度に出题される仕組みです。つまり、

・先輩が頑張つて勉強すると、後輩の試験が難しくなる

という仕組みになっていくのです。今後、C B Tはますます難しくなるでしょう。

歯科の国試が難関化するのに合わせて、卒試とC B Tも難しくなる構造が出来上がっています。しかし、「歯学部に進んでも歯科医師になれないかもしれない」という話が広がれば、ただでさえ敬遠されがちな私立の歯学部の人気がさら

に低下することになります。その結果、  
・歯学部レベル低下↓歯科医師のステータス低下  
というスパイラルが強くなる可能性もあると考えられます。

国公立であれば、大学入学時に一定の基礎学力が付いている学生がほとんどでしょう。しかし、私立歯科大学の入試難易度はそれほど高くありませんから、基礎学力が不足している学生に、能力を上回る要求をしていることになります。真面目に勉強しているのに留年、浪人してしまうリスクがあるのです。

### 歯科だけでない難関化

**安田** 問題は、そこまでして歯科医師数を抑える意味がどこにあるのか、という点にあると思います。すでに、地域によっては深刻な歯科医師不足が起きているのに、これ以上、歯科医師数を絞る理由が分かりません。なぜなのでしょう。

**岡田** 注意すべきは、  
・薬剤師、獣医師の国家試験も難関化し

ている

という事実です。歯科医師、薬剤師は厚生労働省の管轄、獣医師は農林水産省の管轄という点が違います。入学定員が増える一方、国家試験を難関化させることで数の調整と質の担保を両立させようという政策のようです。

一時、薬学部の新設が相次いだため、入学定員は急増しましたが、実際それほど薬剤師需要があるわけではありません。そこで、6年制にするとともに国試を難関化させて数を絞るようになりました。結果、薬学部では6年次の教育を自ら行うことを諦め、予備校に委託する対策を採用しています。

医学部のみは定員拡充の一方で、国家試験の難関化はされていませんが、長期的には医師国試も新規参入者数の調整弁にされる可能性が高いと考えられます。近年では、医学部でもまとまった数の留年者が出るようになり、今後が注目されています。

医療従事者の縮小を図ることで、医療費の増大にブレーキを掛ける狙いがある

のではないかと見る識者もいます。

**安田** 私立歯科大学の歯科国試対策は、多数の学生を留年させることだけですか。

**岡田** そうではありません。例えば、国試の合格率が非常に高いある私立歯科大学では、低学年から多くの補講が行われている上、度重なる試験の実施が、高い合格率につながっているのではないかと見られます。

ただし、歯学部教育が国試対策で加熟しても、実際の合格率には反映されないくい構造もあります。

### 国試対策が難しい大学教育

それは、どのようなことでしょうか。

**岡田** 各大学が教育に力を入れていているといっても、大学の横のつながりが希薄なため、「絶対に国試に出題されないだろう」と誰もが思うようなことが、熱心に教育されていることも少なくありません。多くの歯学部学生が、  
・大学で教えられていることと国家試験

に出ることは別

という意識を持っています。

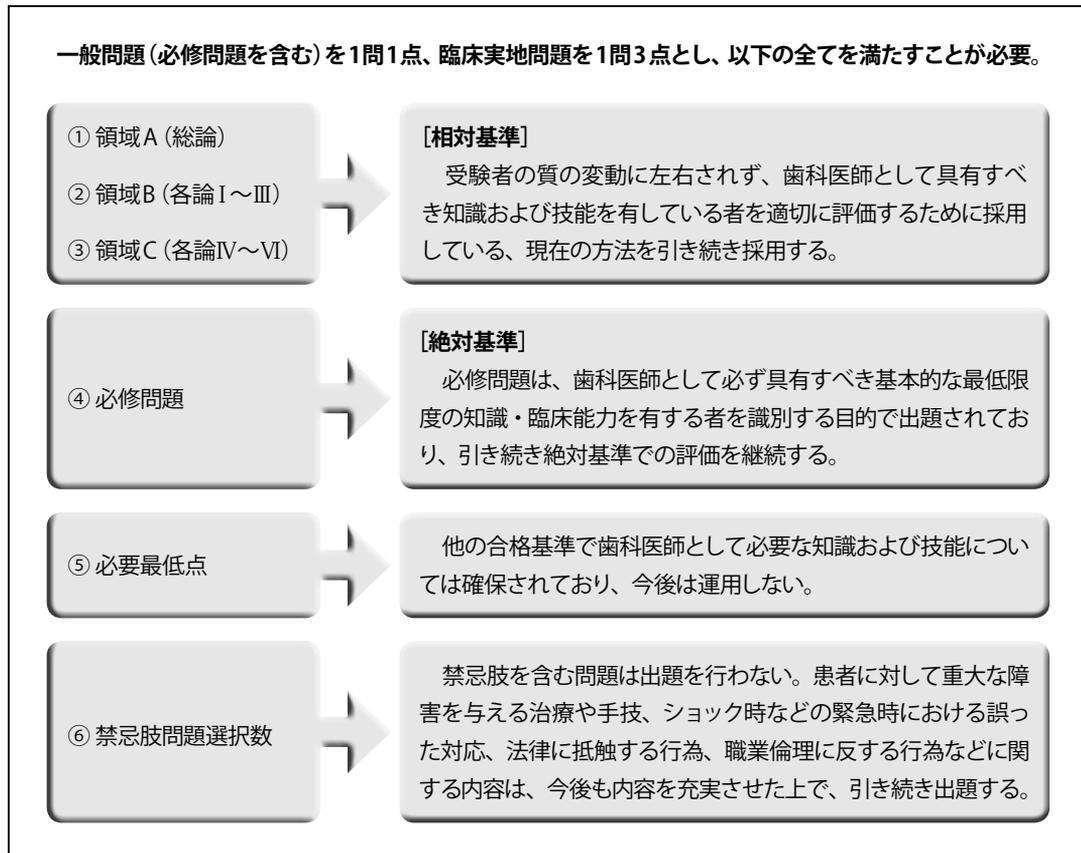
私は、東日本エリアにある全歯科大学の定期試験などの内容を把握しています。が、歯科国試の出題内容と乖離した出題も少なくありません。結果、多くの学生が、卒業までは卒試対策に追われ、それが終わってからの1カ月そこで国試対策に当たらなければならないことになるのです。

**安田** それでは、歯科国試への対策だけを考えれば、歯学部も薬学部同様に6年次の教育を民間の予備校に任せられた方がよいということですか。

**岡田** もちろん、各講座の特色を生かした教育も重要ですが、国試に合格できないければ意味がありません。現実には、基礎系講座の教授に医師を配置している大学の国試正答率が低い傾向にあります。医師は歯科医療と関係性の薄い研究をしている上、多くが歯科の国試に関心が低いためではないかと考えられます。

逆に、近年の傾向として、医師国試からの流用問題も多くなっているため、歯

### 図3 歯科医師国家試験の合格基準



岡田優一郎「歯科医師国家試験浪人の問題点」より改変

科だけの知識では太刀打ちできなくなりつつあります。

本来は、大学間で交流を深め、共同で国試対策を行うことが学生の利益にかなうと考えられますが、互いに国試合格率を競っている間柄ですから、難しい面もあるのかもしれませんが、それ以前に、一つの歯科大学の中でも、統一して国試対策を行うことが難しい体制になっています。

カリキュラムに責任を持つのは教務主任ですが、自分の専門領域外のことからは分からないのが一般的です。仮に「これは国試に出ないのではないか」と思っても、なかなか他の教授の批判はしにくいのが実情でしょう。

**歯科国試の傾向**

**安田** 現在の国試の問題を現役の歯科医師に解かせたら、合格ラインに到達する人はほとんどいないのではないでしょう。これは、現役の歯科医師の学習能力や知識が劣っているということではな

く、

・歯科国試の問題が現実の歯科臨床とはかけ離れている

ということを意味するように感じます。

**岡田** 確かにそういう面はありますね。医師国試で出題された問題が出ることも少なくありません。例えば、ダウン症における甲状腺疾患と環軸椎亜脱臼の関連についての問題が医師国試に出た後、歯科国試でも出題されたことがあります。これらはダウン症の症状一覧で30番目以下の項目で、歯学部教育ではまず触れない内容です。その上、実際の歯科臨床に関係があるかどうか、かなり疑問です。

また、歯科医師が技工操作をしなくなっているのに、義歯の埋没のフランス式、アメリカ式を問う問題などが出題されることもあります。

歯科国試の傾向としては、出題事項の増加(英語の出題、医学的知識、法医学・災害時歯科保健)、出題形式の変化(スパーX・5つの選択肢のうち、正解となる選択肢を全て選ぶもの、多肢選択肢

問題、計算問題、臨床術式を問う問題)、そして合格基準の増加が挙げられます。

特に、合格基準の増加は、多くの歯学部学生にとって頭の痛いものだといえます(図3)。もともと、歯科国試は「一定の基準以上を満たせば合格」という絶対評価方式でした。そこに、第91回国試より、内容が近接した領域を設けて、それぞれに基準点を設ける実質的な相対評価方式が採用され、さらに第95回国試より、必修問題が導入されました。必修問題は8割以上の正答率を満たすことが要求される絶対評価です。

第107回国試からは必要最低点が合格基準に加えられました。質問自体も難しくなってきました(解釈によつて正解が何通りもあるものもある)。過去問をどれだけ勉強しても、それだけでは合格は難しいのが実際のところですよ。

## 中退、浪人するとどうなる？

——留年を繰り返してしまう、あるいは、国試に何度も落ちてしまうという人のそ

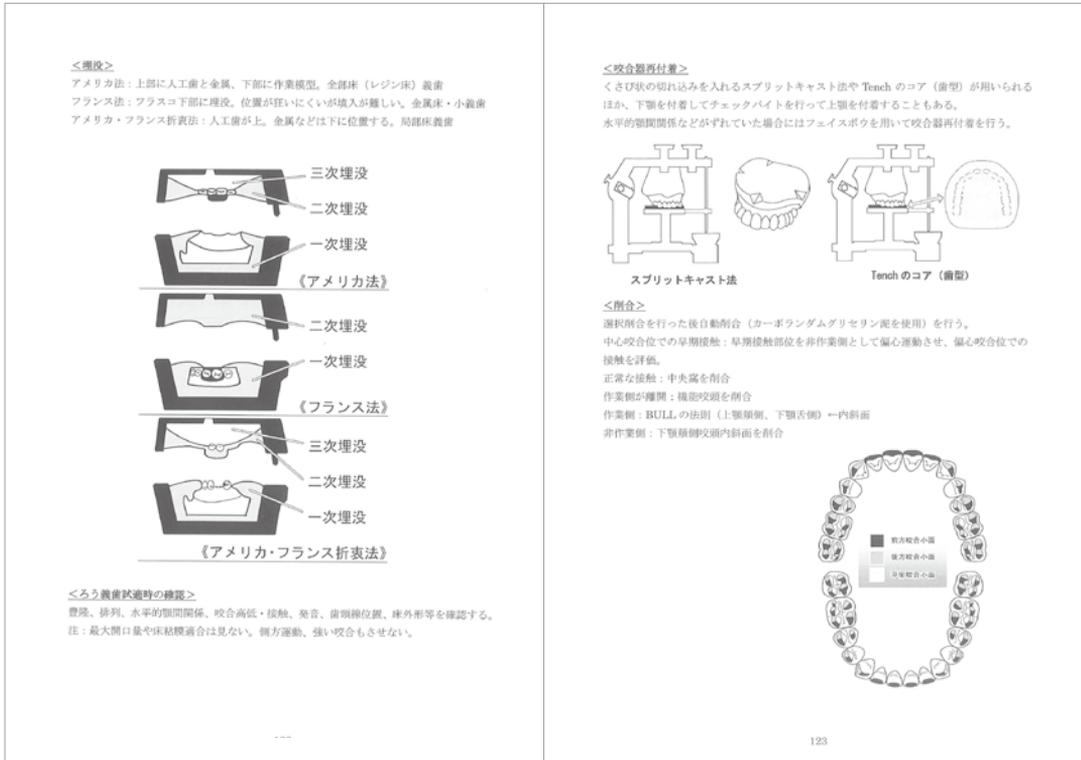
の後は、把握されているのでしょうか。

**岡田** 何度も留年した上に放校処分となってしまう学生、国試浪人で多数回受験している歯学部卒業者については、文科省、厚労省とも把握していないのが実情です。私は、国試合格者を絞る以上、彼らに対する関心を持つことが重要だと考えています。

留年↓放校となった学生は、同じ大学に再入学したり、他の歯科大学に入り直したりしています。例えば、私立大学間で提携し、一方の歯科大学を除籍された学生が優先的に他方の歯科大学に入学できるような対応も取られているようです。

しかし、いずれも卒業は困難で、前につまづいた年次で再びつまずく、ということを繰り返して、4代になっても学生のままといい人もいます。医療法人経営者の子弟で、留年と再入学を繰り返した揚げ句に歯科医師の道を諦めた人が、親の経営する法人の理事や事務職となるケースもあります。

**安田** 他の学部に入り直して、一般企業



東京デンタルスクールの『歯科医師試験対策テキスト 歯科ナビ』。これらの内容を完全に理解していなければ、合格はおぼつかない。

に就職する可能性は。

**岡田** 卒業を諦める時点でかなり年齢が高くなるので、仮に他学部に入学したとしても、卒業後の進路は限られるでしょう。かといって、その後どこにも進学しない場合、最終学歴は高卒になります。年齢の高い高卒者で、しかも社会人経験がないとなると、就職先はかなり絞られてしまいます。

アパレル業界には歯科医師になることを諦めた人が多いことが知られています。これは、アパレル業界には「年齢、経歴不問」というスタンスを取る企業が多いからだと言われています。

国試浪人で、多数回受験をしている人の生活状況についても、あまり語られることはありません。歯学部中途退学者のための支援予備校などは存在しますが、「卒業」してしまった人へのセーフティネットはありません。第109回国試では、浪人生全体の合格率は47・3%でした。1浪であれば約64%ですが、2浪になると約50%、そして5回目の受験となる4浪では約20%となり、合格者の実数

は一桁まで落ちます。

今後、受験回数が増える可能性もありますから、多数回受験をしている国試浪人生は、歯科医師になるのがさらに厳しくなると見られます。国試予備校の中には、合格率に影響するという理由で、多数回受験の浪人生を受け入れない所もあります。

仮に、歯科以外の道を探すにしても、歯学部教育は専門性が高く、一般企業への就職はまず不可能です。政策的に国試を難関化させている以上、彼らの生活実態を把握し、何らかの救済策を講じる必要があるのではないのでしょうか。

## 国試合格の秘訣は？

**安田** かなり厳しい現実を示していたのですが、ますます難しくなる歯科国試に合格する秘訣は何ですか。

**岡田** 私は学生時代から予備校講師をしていましたが、勉強の仕方を変えるだけで劇的に成績が上がるのがしばしばあります。歯学部の進級試験対策、C B T

対策、卒試対策、国試対策も同じです。

真面目に勉強しているのに成績が奮わない学生がいますが、多くの場合「真面目すぎて全部を暗記しようとして失敗する」「周囲に溶け込めないのがノートのやりとりや情報のネットワークから離れてしまう」ということが成績不振の原因だったりします。勘所を押さえた勉強方法を身に付けると、自然に成績が上ってくるものです。

このような、ある種の要領の良さが必要なのですが、もう一つ、

・歯科の勉強を楽しむことで高い学習成績につながる

という点を強調したいと思います。

私は、日大の附属高校から松戸歯学部に入學しました。きっかけは、小澤幸重教授（組織学）が行っていた恐竜の歯の研究に惹かれたことです。高校生の時から教室に出入りしていましたが、入学後も、とにかく歯のことを学ぶのが楽しくて仕方がありませんでした。ひたむきに勉強することが苦にならなかったのは、その分野が楽しかったからだと思います。

**安田** 歯学は、他の理系学問に比べて課題が明確で分かりやすいというところがありますね。私が大学院生の時に勉強した接着歯学の分野でも、「強固に接着すること」「膨縮が少ないこと」など、臨床に直結する技術課題を解決する分かりやすい目標が掲げられていました。そして、前人未踏の領域がいくらでも作れます。

理系系などは、「何に役立つか一生かけても分からない」という奥の深い研究が数多くありますが、価値や意義が分かりにくいという面もあります。歯学にはそういった面が少ないため、熱中しやすい魅力があります。確かに勉強を楽しいと思えば、国試の難関化にも備えられるかもしれませんね。

しかし、多数の留年・中退者、国試浪人を生み出す構造を許容している歯科界が、彼らの置かれている状況にあまり関心を持たないのは問題ではないかと感じます。現状を把握し、彼らのためのセーフティネットを整備していくことが必要だと感じました。

——本日は、ありがとうございました。